

論 文

ハイエクにおける J.S. ミル

——「競争」と「慣習」の問題を中心に*——

吉 野 裕 介**

要 旨

本稿の目的は、フリードリッヒ・ハイエク (Friedrich Hayek, 1899-1992) のジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) に対する評価の変遷を追い、かれの思想の特質を、とりわけ競争と慣習の観点から明らかにすることである。

ハイエクは、ミルに与えたハリエット・テイラーの影響については積極的に評価しながらも、複数の著作で繰り返しミルの思想を批判的に論じた。とりわけ後半生には、その批判的なトーンは強まったように見える。こうしたハイエクのミル解釈の意図や背景を検討するため、まずはハイエクのミル評価が、その生涯のなかで、どう変化したのかを追う。さらに、競争と慣習の観点から両者の学説を比較検討することで、これまで十分に論じられてこなかったかれの思想の一面に、光を当ててみたい。

まず一節では、ハイエクの著書におけるミルへの評価を時系列順に吟味する。次に二節では、両者の共通点と相違点を、「競争」と「慣習」という観点から考察する。さらに三節では、ハイエクとミルの社会思想におけるもっとも隔たりがあると考えられる「功利主義」に対する見解の相違について検討する。最後に四節では、本稿を通じて明らかになったハイエクの思想の特質を整理し、結語とする。

本稿の考察によって得られた結論は、以下である。ハイエクはハリエット・テイラーがミルに与えた影響を好意的に評価した。さらに活動の中期には、ミルを参照して自由論の構築を目指した。にもかかわらず、前期の著作から、大陸合理主義をイギリスに持ち込んだ人物としてかれを批判的に扱った。そして、後期の著作においては、経済学を社会主義の方向へと向けるきっかけを作った人物として論じた。このような言説の背景には、ハイエクのミルに対する解釈が特徴的であったことが挙げられる。すなわち、ミルがさまざまなタイプの慣習を論じていたにもかかわらず、ハイエクはミルの「慣習」を、常に社会の発展を阻害する悪しき因習と解釈した。ま

*本稿は関西大学経済学会第35回夏期研究大会における研究報告（「ハイエクの慣習論：J.S. ミルに対する評価の変遷から」関西大学経済学会 Working Paper Series, 関西大学経済学部、J-50, pp. 1-16, 2019年7月）が元になっている。その際コメントや質問をくださった先生方に感謝申し上げる。また、本稿へ詳細かつ的確なコメントをくださった小沢佳史氏（立正大学）に衷心より深謝申し上げたい。もちろん本稿における誤りは、全て筆者の責に帰するものである。なお、本稿の作成にあたっては JSPS 科研費基盤研究 B (19H01472) の助成を受けた。

**関西大学経済学部 e-mail: yoshino@kansai-u.ac.jp

た、ミルが論じた比較的穏健な意味での「社会主義」に対しても、ハイエクはマルクスに向ける以上のトーンでもってこれを批判した。

キーワード：ハイエク、J.S. ミル、自由主義、競争、慣習

はじめに

本稿の目的は、フリードリッヒ・ハイエク（Friedrich Hayek, 1899-1992）のジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）に対する評価の変遷を追いつつ、かれの思想の特質を、とりわけ競争と慣習の観点から明らかにすることである。

両者はそれぞれ、十九世紀と二十世紀に分野横断的な功績を残した経済学者・社会哲学者である。かつてミル研究者の矢島が「ミルの『自由論』以降、それに匹敵する包括性と深さをもって現代社会が提起する自由の問題を扱ったのは、ハイエクではないか（矢島, 2001, p. 492）」と形容したように、かれらは生きた時代こそ違うが、共に「自由」の問題について深く考えた思想家の代表的な存在と言えるだろう。

二人は活動した時代が異なるので、直接の応酬は当然存在しないとはいえ、ハイエクがミルをどのように評価していたかは、思想史研究者の関心を惹くトピックであろう。しかしながら、これをひとくくりに語ることはたやすいことではない。その理由は、ルジェが指摘したように、両者の終生にわたる論調の変化に起因する（Légé, 2008, p. 213）。ハイエクは、終生自由主義的なスタンスを維持しつつも、おおよそ70年の長きにわたり専門的な研究に従事し、膨大な著作を著す間に、さまざまに論じ方を変化させたことでも知られている¹⁾。他方でミルについても同様に、後半生の社会主義への傾倒に見られるようなトピックの移り変わりが見られる。つまり、さまざまな問題を議論したミルに呼応するように、ハイエクもまた、言及する論点を変えていったと考えられる。

ミルに関する関心は、ハイエクの青年期に始まるが、著作物においても、最後に上梓された『致命的な思いあがり』（1988年）まで言及は続いた。コールドウエルによれば、かれが最初にミルの著作に本格的に触れたのは、20代前半に15ヶ月間滞在したアメリカのコロンビア大学で、W.C. ミッチェルによる「経済理論の諸類型」と銘打たれた講義を受けたときであるという（Caldwell, 2008, p. 691）。それは周到に用意された網羅的なもので、ここでハイ

1) こうしたいわゆる「ハイエクの転換」問題については、現在では、こうしたハイエクの論調の変化は、ドラスティックな転向ではなく、漸次的な関心の移行と解釈されることが多いようである（吉野, 2014a）。ルジェによれば、ミルに関する記述に限っても、いくつかの「強調点の変化」が見られるという（Légé, 2008, p. 213）。

エクは英語で書かれた古典を読破する経験をしたのであった。ミッチェルはミルを「偉大な改革者」として好意的に捉えていたという。

さらに1930年代に入り、LSEに職を得てロンドンに居を構えたハイエクは、いつとき戦火を逃れてケンブリッジに疎開していた。このときに本格的にミルの原著に触れる機会を得たことは本人も述懐している通りである。「私が経済学関係の古書を収集するという自分の趣味にふけることができたのもまた、ケンブリッジ時代であった」（Hayek, 1994, p. 136, 訳p.160）。この経験がきっかけとなって、1942年にはミルの著作集『時代の精神（The Spirit of the Age）』（Mill, 1942）の復刊に携わり、自らその序文を書いたのであった（Hayek, 1942）。1951年にはそうした成果を活かして、ミルとその妻ハリエット・テイラーとの知的交流を描いた往復書簡集『J.S. ミルとハリエット・テイラー～二人の交流とその後の結婚』（Hayek, 1951b）を編纂し、これにも序文を寄せた（Hayek, 1951a）。このような事情もあって、かれ自身は、自分が周囲からミルについて詳しい研究者として認知されているという認識は少なからず持っていたようだ。

山下が述べるように、ミルを主たる研究対象とする者たちから見れば、ハイエクは、それまで低く見積もられていたミルの思想形成におけるハリエット・テイラーの存在を「再発見」し、いわばその「地位の向上」に大きな役割を果たした人物だとみなされている。「往復書簡（引用者注：『J.S. ミルとハリエット・テイラー～二人の交流とその後の結婚』のこと）の編者ハイエクは、……ミルの思想形成上の夫人（引用者注：テイラーのこと）の影響力を高く評価し、バックとボーチャードのミル伝²⁾もこの見解に従っている」（山下, 1971, p. 153）³⁾。さらに、川名による近年のミル研究に関する広範なサーベイによれば、この問題については昨今「自律の重要性に対するハリエットの（精神的なものにとどまらない）知的影響を指摘する、いわゆる『ハリエット・テイラーの神話』について、あらためて積極的な見解が打ち出されている」（川名, 2015, p. 86）のだという。こうした言及からわかるように、ミル研究においてハイエクは、まさにこの「神話」を定式化した人物という位置付けがなされているのである。

2) (Borchard, 1957; Packe, 1954)

3) ただし山下は続けて、パップの著書『ジョン・スチュアート・ミルとハリエットテイラー神話』（Pappe, 1960）に触れつつ、「（引用者注：ハイエクたちの）このような見方には反論もある。すなわちパップは、ミル夫妻の往復書簡とハリエット夫人の遺稿の綿密な検討に基づいて、ハイエク、バック、ボーチャードの結論に反駁し」たのであり、「ミルとハリエットとの思想的関係に関する問題は、いまだに『神話』のヴェールを取り去ったと言うことはできない」（山下, 1971, p. 153）と、ミル研究者の中でも意見が割れているさまを注意深く指摘している。さらにこの問題について詳しい論考として、（泉谷, 1977）を参照のこと。

かれ自身の言葉でも、テイラーの学問的能力は、ミルに十分な影響を与えうるに足るものとして描かれている。「ハリエットの才能がどんなものであったとしても、ミルの思想や展望にたいする彼女の影響は彼が主張しているように非常に大きかった」(Hayek, 1951a, p. 17, 訳 p.170)。さらには、テイラーのミルへの影響について、より思想的・哲学的な側面を強調することも忘れてはいない。「彼女の影響は現在一般に信じられているのとはかなり異なった仕方で作作用したということである。その影響によって強化されたのは、主にミルの思想における合理主義的要素であって、感傷的なものではまったくなかった」(Hayek, 1951a, p. 17, 訳 p.170)。このように、ハイエクはミルとテイラーとの関係性について、往復書簡集に見られるような情緒的な結びつきを重視したにとどまらず、学術的な影響もまた小さくなくと評価した。

しかしながら、こうして両者の関係性に関心を寄せた時期があったにもかかわらず、晩年のハイエクがミルに下した評価を見てみると、あまり肯定的に捉えているようには見えない。「…わたしはジョン・スチュアート・ミルの研究に何年もかけましたが、その研究は、自分が偉大な人物だと考えた人に対する賞賛の気持ちを揺るがしました。その結果、現在の私のミルに対する評価は、かなり批判的なものです」(Hayek, 1994, p. 140, 訳 p.179)。したがって、いまわれわれがハイエクのミル評価を振り返る時、それは賛否がないまぜになった、奇妙なものとして映る。このようなある種の「ずれ」が生ずるのは、いったいどのような背景あるいは経緯があつてのことなのか。換言すれば、ハイエクのミル評価は、その生涯のなかで、どのように変化したのか。このような関心にはじまって、本稿では、ハイエクによるミルに対する言及を追い、その意義を再考することで、かれの思想のこれまで十分に論じられてこなかった側面に光を当ててみたい。

まず一節では、ハイエクの著書におけるミルへの評価を時系列順に吟味する。次に二節では、両者の共通点と相違点を、「競争」と「慣習」という観点から考察したい⁴⁾。この二つの概念を取り上げる理由は、そこに彼らの差異が顕著に現れるからである。ミルは、『経済学原理』第2巻第4章において、生産物の分配は、競争と慣習という二つの決定要因によってなされると考えそれを重点的に論じた。だがそのミルの分配理論こそ、ハイエクが批判の対象とした点であった。さらに三節では、ハイエクとミルの社会思想におけるもっとも隔たりのあると考えられる「功利主義」に対する見解の違いについて検討する。最後に四節では、本稿を通じて明らかになったハイエクの思想の特質について述べ、結語とする。

4) ただし、ハイエクの思想体系に関して「慣習」に着目する解釈は、とりわけ日本のハイエク研究史において、しばしば見られるアプローチである。例えば(間宮, 2006; 西部, 1996)などを参照のこと。また、ミルの分配理論における慣習と競争との関係性を強調する考察は、例えば(佐々木, 1995; 諸泉, 2004)などを参照のこと。

一 ハイエクのミル評価

1 「真の個人主義と偽の個人主義」

上述の通り、ハイエクがミルのテキストに触れたのは20代前半つまり1920年代のことであったが、書き物にその名前が登場するのはもっと後のことである⁵⁾。ハイエクはイギリス在住時の1945年、ダブリン・ユニヴァーシティカレッジで「真の個人主義と偽の個人主義」という講演を行っている。これはのちに論文になり、論文集『個人主義と経済秩序』（Hayek, 1948a）に収録された。以下ではまず、ここに登場するミルに対するハイエクの言及から見ていこう。

同論文の主たる主張は、自由主義の基礎となるタイプの個人主義と、そうではなく自由の意味を取り違えて使っている個人主義とがあり、前者をハイエクは支持するというものである。ここで前者は「真の個人主義」、後者は「偽の個人主義」と称されている。前者に属するグループは、ジョン・ロック、バーナード・マンデヴィル、ヒュームからはじまって、ジョサイア・タッカー、アダム・ファーガソン、アダム・スミスらに代表されるような、18世紀までに興隆したスコットランド啓蒙の思想家たちである。ハイエクの理解では、かれらの思想は19世紀に入ってトクヴィルとアクトンによって受け継がれ、より発展を遂げていったと考えられているが、かれは自らをその系譜の延長に置き、真に自由を擁護する個人主義として分類した。他方で、百科全書派、ルソー、およびフィジオクラートらによって展開された、大陸合理主義に属する思想グループがある。ハイエクは、イギリスの思想家であるミルとスペンサーを、かれらに影響された「偽の個人主義」を受け継いだこうした知的集団と同じグループに分類し、一様に合理主義の影響を受けた思想家として批判した。

また、真の個人主義は「人間の諸事象に見られる大部分の秩序を諸個人の行為の意図せざる結果として説明する」（Hayek, 1948a, p. 6, 訳 p.11）のに対し、偽の個人主義は「発見できるすべての秩序が計画的な設計による」とみなす見解を採る。そこで前者を支持するハイエクは、人間の持つ合理性は限定されており、完全ではないという想定に立つ。それでは、このような限定的な合理性しか持たないひとりの人間が、いかにして社会を考察できるのか。これについてかれは「他人に向けられかつ他人の予期される行動によって規制される人びとの行為をわれわれが理解することを通す以外には、社会現象の理解への道はない」（Hayek, 1948a, p. 6, 訳 p.11）と述べる。すなわちこれは、観察者がその主観的な把握を通じて、部

5) 1930年代あたりのハイエクは経済理論家としての業績が多く、1940年代に入って少しずつ経済思想家としての業績が増えていく。ミルの名前が登場するまでに、1940年代まで待たねばならないのは、こうしたハイエク自身の研究領域の移り変わりとは無関係ではない。

分的にのみ社会を分析可能であることを意味する⁶⁾。他方で、人間がそもそも合理的な存在であるという想定に立つならば、そこから「社会やその他の社会的な全体的存在を、それらを構成する諸個人とは独立に存在する特殊な実体として直接に把握できると主張する」社会理論が導かれる。これは、外側から客観的に社会を見ることができるといふ思考法であるが、ハイエクはここにミルを分類した。

さらに、「真の個人主義」的アプローチによる社会理論は、人間行動の意図せざる産物に注目し、その発生を分析することを目的とする。「『真の個人主義』は自然発生的な社会的産物の形成を説き明かすと主張することのできるただ一つの理論である」（Hayek, 1948a, p. 10, 訳 p.14）。前者のような社会理論は、個人がシステム全体を把握できないために、社会全体で同様に機能する「一般的なルール」を設けるといふかたちで統治を企てる。また、個人の自発的協力を重視するから、強制的な権力を排除することを指向する。真の意味での個人主義においては、「人間はもし自由の状態におかれるならば、個人の人間理性が設計しうるもの、もしくは予想しうるものをしばしば成し遂げるといふことを信じる」（Hayek, 1948a, p. 10, 訳 p.14）のである。それに対して、社会を外側から観察できるとする「偽の個人主義」的アプローチからは、社会の発展段階、法則を客観的に観察できるとする社会理論が作られる。そうした理論においては、個人がシステム全体を把握できるといふ仮定を置くので、特定の人物による「指令」によって人びとに特定の義務を課すような統治のタイプだと想定されている。

このような個人主義に関する二分法に基づいて、次にハイエクは、「真の個人主義」に基づく社会の成立にとって、「伝統」や「慣習」が重要な役割を果たしているという洞察を導く。伝統や慣習が必要なのは、なにより社会がカオスに陥らないために人間が徐々に獲得してきた賢慮そのものである。もちろんハイエクは、こうした伝統や慣習が、すでに文字になった法やルールのみならず、時に暗黙知の形をとって、知らず知らずのうちに人びとに働きかけることにも着目する。これらに従う行動は、それぞれの人間が意識せずとも取られることもある。こうして、明文化されたルールだけでなく、暗黙的に存在するルールが十全に働くことで、自由な社会において、人びとは他人の行動やその結果をある程度予測しながら行動決定することが可能になる。自由な社会における伝統と慣習の重要性について、最も的確に示されている文章を、以下に引用しよう。

「個人主義的が機能的に働くために、これらの人間の比較的小さい人間集団に劣らず重

6) このような社会に関する主観主義的な理解は、オーストリア学派に特徴的な方法でもある。これについてより詳しくは、(吉野, 2014a) 第三章を参照のこと。

要なのが、自由な社会において成長する伝統と慣習である。そのような慣習と伝統は、強制的であることなしに、柔軟性を持ちながら、しかも通常よく遵守されているような諸規則を定着させ、これによって他人の行動を前もって相当程度予測可能にさせるのである。……誰が設計したのではなく、その存在理由を誰も理解しないということもまた、もし強制をなくすことが可能であるとしたならば、その不可欠の条件である。ある一つの集団内に共通の慣習や伝統が存在することが、そのような共通の背景を持たない集団と比べて、人びとをしてはるかに少ない形式的な組織や強制をもって、人びとのあいだに円滑に能率のよい協力を得させることになるということは言うまでもない。しかしこの逆は、それほどに周知のことではないが、多分同様に真実であろう。すなわち、強制が最小限に留めらうるのは、慣習と伝統が人間の行動をおおよそ予見可能にさせている社会においてである」(Hayek, 1948a, p. 23, 訳 p.27)。

このように、ハイエクの説明によれば、これまで発展してきた伝統や慣習に従うことで、個人の強制を最小限にとどめた自由な社会は成立可能である。そしてかれは、こうした記述の少しあとで、ミルの個人主義をこうした伝統や慣習に追随する行動を必要としないタイプの自由主義だと批判する。「他人とはっきり異なった個性のこの崇拜は、…J.S. ミルの『自由論』にはその影響がはっきりと見られる。この種の『個人主義』は真の個人主義と何の関係もない」(Hayek, 1948a, p. 26, 訳 p.31)。つまり、ハイエクにしたがえば、ミルの個人主義は、社会が発展していくうえで慣習や伝統の存在が必要であることは説かれておらず、むしろこうしたものを排除し、それらから独立すべきだと主張したことになる。これについては4節以降にミル側の見解も参照しつつさらに検討したい。

2 『J.S. ミルとハリエット・テイラー～二人の交流とその後の結婚』

1951年刊行の同書は、ハイエクがミルとテイラーとのやり取りを編纂した書簡集で、かれらの交流を描いた伝記的な著作となっている。そのため、ここからハイエクとミルの論理の異同を抽出することは、一見困難に見える。しかし、その後の自由論の考察へと向かうハイエクの関心を読み取るには格好の著作だと位置付けられるので、以下にこれについて吟味したい。

古書収集をライフワークとしていたハイエクは、戦時中にイギリスでミルの手紙が入った書簡を偶然手に入れ、助手のルース・ボーチャードと共にそれらを調査したことがあった。それを読み解くなかでかれは、ミルの思想形成におけるテイラーの存在の大きさについて知り、ミルとテイラーの間で交わされた手紙のやりとりを、一冊の書物にまとめようと考えた

のだった。

同書の特色は、前文でハイエクが記しているように、ミルだけでなくテイラーの思想をも同様に重視することで、ミルに対するテイラーの影響を明らかにしただけでなく、彼女をヴィクトリア時代のひとりの知識人として、高く評価したことにある。「ミルにたいする影響が、彼が主張するほど大きかったということだけでも、後期ヴィクトリア朝の世論を形成した重要な人物の一人と考えなければならないだろう」（Hayek, 1951a, p. 13, 訳 p.133）。こうしたハイエクのテイラーに対する好意的な評価は、かれの個人的な事情と無関係ではないように思える。

ここ最近伝記的な研究が進むなかで次々と明らかにされていることだが、ミルに与えたテイラーの影響が大きいことと同様に、ハイエクの再婚相手であるヘレーネは、かれの思想形成を考えるうえで重要な存在である⁷⁾。ハイエクがイギリスからアメリカに渡り、さらにヨーロッパに戻った事情には、彼女との生活が常に念頭にあった。アメリカに渡ったのも、法律上の問題で再婚が可能な場所だったからである。またハイエクは家庭ではヘレーネに合わせてドイツ語で会話した⁸⁾。青年期に故郷のウィーンを離れ、以降は生涯を通じて転居を繰り返し、いわばコスモポリタンとして生きたハイエクとは対照的に、ヘレーネはウィーンの文化を色濃く受け継いだ、ある意味ではかれが自らの「原点」を回顧（そして懐古）させてくれる人物であった。

さらに、ハイエクの再婚に至る過程を考慮する時、かれがミルに自分の境遇を重ね合わせていたとしても不思議ではない⁹⁾。ハイエクがミルに関する同書を準備していた時期と同じ頃に書かれた『感覚秩序』の序文では、ヘレーネへの感謝が述べられている。「私の原稿について妻の批判が無かったならば、この本は不明でずさんな表現の箇所を少なくすることはできなかったであろう」（Hayek, 1952, p. ix, 訳 p.7）。

1951年に二つの著作を刊行した後、ハイエクはヘレーネと共に、1954年から55年にかけて、ヨーロッパやエジプトなどを旅した。それは、百年前にミルがテイラーと共に周遊したコースとまったく同じ道程であった。こうしたなかで、ミルのように、自由の問題を中心的に扱う著作のアイデアが浮かんできたのである。（その当時）「……ミルの思想にずっとつき合ったこともあって、1955年秋にシカゴに戻った後、『自由の条件』を書く計画が突然私の眼前にはっきりと見えてきたのである」（Hayek, 1994, p. 129, 訳 p.162）。これらのことからわかるように、ハイエクの執筆活動の外在的要因を考えるうえで、ミルの存在は決して無視

7) このことを含めたハイエクの生涯初期の伝記的な情報に関しては、近年とみに研究が進んでおり、とりわけ (B. Caldwell, 2003; B. J. Caldwell & Klausinger, 2022) などに詳しい。

8) ハイエクの家庭のなかの様子については、晩年の秘書キュビットによる手記 (Cubitt, 2006) に詳しい。

9) ハイエクの離婚と再婚およびそれに伴うシカゴへの転居については、(Ebenstein, 2018) に詳しい。

できない。かれのミルに対する評価は、決して批判的なものだけではない。少なくともハイエクは、1940年代後半から50年代にかけて、ミルの文書に数多く触れ、それを世に出すべく尽力していた。そして、この40年代から50年代にかけてのハイエクは、次に刊行される『自由の条件』を準備していた時期にあたる。そこでのミルの存在は、この時期の執筆活動のひとつのよりどころであったことがうかがえよう。

3 『自由の条件』

こうして1960年にハイエクは、ミルに触発され執筆した『自由の条件』を上梓した。同書は、自由な社会の基本的な構造に関する社会哲学の著作であるが、なかでもここで着目すべきは、「知識」に関する洞察である。自由な社会が発展するためには、社会全体で知識の成長が共有されねばならないが、それにはそもそも個人が自分の知識を自分のために使えることが、自由な社会が成立する基礎的条件となる。こうしてかれは、人びとが知識を獲得するために必要な制度として、教育の重要性を論じるに至る。これについて、ハイエクは次のように述べている。「知識を求め、あるいはそのためにある程度の犠牲を払う自発的誘因をほとんど持っていない人たちに知識を提供することが、社会全体の利益になるであろうといういろいろな理由が存在する。これらの理由は、特に子供の場合に、有無を言わずあてはまる」(Hayek, 1960, p. 376, 訳 p.166)。

教育に関する章は、全24章（と補論「なぜわたしは保守主義者でないのか」）にわたる同書の最終章に据えられている。ハイエクはここで、ミルの『自由論』を幾度も引用し、教育の重要性について語っている。ただしその論調は、決して否定的なものではない。ミルがフンボルトを引用した箇所と言及し、人間の個性を発揮することの重要性を強調している。「われわれは結論としてヴィルヘルム・フンボルトの言葉ほど適切な言葉を知らない。この言葉はジョン・スチュアート・ミルが今から百年前に、その著作『自由論』の冒頭に掲げたものである。『本書に展開されているいかなる議論も、直接的に合致する偉大にして主要な原則は、人間が最も豊かな多様性において発展することが絶対的かつ本質的に重要だということである』」(Hayek, 1960, p. 394, 訳 p.189)。文明全体から見た知識の成長という観点に立てば、多様な個人がそれぞれの知識を有効に利用できること、およびそれが伝播することが、結果として社会全体の利益となる。つまり、自由な社会にとって教育は、重要な基礎を構成する制度（constitution）なのである。こうした見解は、同じくミルが『自由論』で展開した、個人の多様性を重視した議論に、大きく影響を受けていると考えられよう。

しかしながら他方でかれは、「私的領域」の規定に関する箇所で、ミルの主張に異を唱えている。ここでの関心は、どのような主体が強制を行使するのか、あるいは国家がどのよう

に、そしてどこまで個人に対して強制を強いるのか、についてである。確かにミルは『自由論』第一章において、「個人の独立と社会の調整のあいだで適切な調整をどう行うか、という実際的問題は、まだほとんどすべてが今後の解決にゆだねられている問題なのである」（Mill, 1977 [1859], p. 220, 訳 p.219-220）と述べて、このことを問題提起した。これに関しハイエクは、『自由の条件』第九章「強制と国家」において、次のように述べている。「私的領域の規定を試みた人のうちでも著名なものは、ジョン・スチュアート・ミルで、かれはその行為をおこなうその本人にだけ影響する行為と他人にも影響を与える行為とのあいだの区別によって強制から免れる私的領域を限定した。しかし、他人に影響を与えないと考えられるような行為はほとんどないので、この区別はあまり有益とは認められなかった」（Hayek, 1960, p. 145, 訳 p.120）。

伝統や慣習の重視からもわかるように、ハイエクにおいて個人とは、決して社会から切り離されず、常にそれに影響を受ける存在だとみなされている。したがって、社会が複数の個人から構成される以上は、ある特定の人間の行為が他人に全く影響を与えないという状況は想定されていない。かれは、次のように続ける。「われわれがこれまでに見てきたことは、文明の成長によってたえず与えられる新しい可能性を学ぶ機会こそが、自由を主張する主要な論点の一つをなすということである。したがって、…自分たちの考え方に関する根深い慣習（custom）を妨げるものを嫌って、われわれがある種の活動の遂行を抑制しなければならないとすれば、それは自由擁護論をすべて無意味にするであろう」（Hayek, 1960, p. 145, 訳 p.120-121）。このように、ハイエクが自由主義を擁護する根拠のひとつは、知識が成長する可能性が、自由な社会に見いだせるからである。かれの考えにしたがえば、慣習が妨げられることで、私的な領域のなかで自由な行動が抑制されるならば、それは望ましい自由社会とは言えない。

さらにハイエクは、先の「真の個人主義と偽の個人主義」論文で用いた二分法を再び参照し、社会理論の伝統を、今度は「経験主義的な進化的理論」と「合理主義的な設計理論」という二つのグループに分類する。その要点は、現存の秩序の発生プロセスに関する見解の違いとしてまとめられている。すなわち、前者の社会理論は、現存の秩序が「人間の行為の結果」として生じ、またそれらの累積的な成長の過程として存在していると理解する。それらは「制度や道徳、言語や法が、累積的成長の過程を経ていかにして展開してきたか」に注目し、「制度の起源を発明あるいは設計ではなく、成功したものの存続に求める」。他方で後者の理論は、「前もって存在する人間の理性がこれらの制度を発明した」（Hayek, 1960, p. 57, 訳 p.83）と考えられている。

ここでの分類にも、ハイエクのミル批判が現れている。それは、ミルが持ち込んだ「経済

人」の想定が、合理的にふるまう個人を想定しているという問題である。ハイエクは後期になるにつれて進化論的な説明を多く取り入れるが、そこで想定されているのは、決して合理的とは言えない人間が、経験を通じて少しずつ賢慮を獲得するという、ハイエクの言葉で「反合理主義的」（経済学的には限定合理的とも表現できるであろう）な人間観である。このような見解は、いわゆる「主流派経済学」で想定されている合理的な人間観とは真逆に位置するものだが、この源流として、かれはミルの名前を示すのだった。「『経済人』のような有名な虚構でさえ、本来イギリスの進化的伝統に属するものではなかった。…ホモ・エコノミクスは、進化的理論よりむしろ合理主義の伝統に属するもので、青年ミルが、その他の概念と共に明示的に導入したのである」（Hayek, 1960, p. 60, 訳 p.88-89）。

『自由の条件』の執筆の動機のひとつが、ハイエクが行なってきたミル研究にあったことは上に述べた通りである。そのタイトルからもうかがえるように、ミルの『自由論』を強く意識して書かれたと推察できよう。しかしながらここでのハイエクのミルに対する見解は、賛否が混在しているように見える。個性の重視や自由な社会における知識の成長という観点に立てば、ハイエクはミルの関心を踏襲しているといつてよい。しかしながら他方で、ハイエクの考える社会理論の二つの分類に照らせば、ミルは、ハイエクが批判した大陸の合理主義の流れを汲んだ批判すべき人物なのである。

4 『法と立法と自由』

同書におけるミルに関する言及は、第九章「『社会的』あるいは分配の正義」に見られるように、これまで以上に否定的な口調の強いものになっている。ハイエクは前著『自由の条件』執筆後、すぐに次の準備に取り掛かった。その理由は、前著においては、ミルが普及させた合理主義的な思想潮流を徹底的に批判するという目的が十分達成できずに終わったと考えていたからである（Caldwell, 2008, p. 700）。

同書におけるミル批判の中心的な部分は、分配的正義をめぐる議論に現れている¹⁰⁾。以下

10) このような経済理論におけるハイエクのミル批判を扱った論文に、（諸泉, 2004）がある。それによれば、ハイエクもミルも、経済社会における分配機構を肯定する点では共通点を持つ。ただ両者の相違は、そうした分配機構を自然発生的とみなすのか、改良しうる制度と捉えるかにあるという。そして、かように見解が異なる理由は、慣習の捉え方の相違であり、分配機構をそのなかに含めるかどうかにある、とされている。ここでも、大きな問題としてやはり「慣習」が指摘されている。「ハイエクでは、市場機構によって結合される知識のなかに、こうした有益な慣習や伝統が織り込まれている。ミルもまた、分配を決定するのが競争と慣習であることを強調する。…しかしミルにとってこうした慣習は、ミルの時代にはすでに機能しなくなっている。それゆえにこそミルは、労働者が自らの状態を改善して行く手段を、慣習ではなく、労働者自身の自律的判断力に求めたのである」（諸泉, 2004, p. 126）。ミルの分配論に関しては、（岡本・小沢, 2021, pp. 27-34）にも簡潔な解説がある。

にこれについて検討しよう。自由主義の社会においては、すべての人びとがルールの下に平等でなければならないという前提が必要である。しかしながら「社会的正義」という政治的な産物は、特定の人びとに便宜的な処遇を与えることから、これに賛同はできない。それゆえハイエクは、この概念が人びとの間に広まることを警戒し、それが実際に機能する際に起こる便益の「分配」という概念そのものに批判を加える。かれによれば、このような「社会的正義」を分配に結びつけ広めた役割はミルの功績が大きいのだという。「それ（筆者注：社会的正義という用語）が今日一般的に用いられ、不断に世論に訴えかけられる意味は、…『分配の正義』という表現が長く採られてきた意味と基本的に同じである。ジョン・スチュアート・ミルが以下の言明において二つの用語をはっきりと等価物として処理した時に、（そしておそらく一部はそのために）、社会的正義はこの意味で一般的に流布して行ったように思う」（Hayek, 1976, p. 63, 訳 p.90）。かくして、この時期のミルに対する評価は、それまでのように、合理主義的な社会理論に属する思想家のなかの一人という批判ではない。再分配を肯定する議論を経済学を持ち込み、そして一般に流布させた張本人というより批判的な扱いになっている。

同書におけるミルへの言及はさほど多くないが、同時期に出版されたものとして、1973年にイタリアで出版された百科事典のために書かれ、その後1978年の論文集に収録された「自由主義」がある。この時期のハイエクの考え方をよく表している文章と思われるが、ミルに対する言及もあるので追加的に参照しておこう。一点目は、大陸型の自由主義の普及に関する箇所である。ドイツの自由主義の発展に貢献した人物として、かれはカント、フンボルト、そして詩人のフリードリヒ・シラーを挙げている。なかでもフンボルトは、「法と秩序の維持にのみ限定された政府像」という点でミルに影響を与えたという（Hayek, 1978b, p. 127, 訳 p.129）。

二点目は、より直接的であるが、次のようなものである。「十九世紀後半の知的サークルでは、自由主義の基本理念が盛んに議論された。フンボルトの主張と似た、個人主義に基づいた最小国家を主張した人びとは、ハーバート・スペンサーという良き代弁者を得た。一方、ジョン・スチュアート・ミルは著書『自由論』（1859年）で、政府の行動ではなく、世論の専制を取り上げて批判を展開した。そして、他の著作では、分配的正義を訴え、社会主義の主張にも共鳴するような態度を示して、自由主義の知識人が徐々に穏健な社会主義へと移行する道を開いた」（Hayek, 1978b, p. 129, 訳 p.131）。この記述はすでに見たように、この時期のハイエクの見解をよく表している。つまり、ミルが分配的正義を唱えたこと、そしてそれが穏健な社会主義へと自由主義思想を転換させる道筋を示したことが、ハイエクにとって批判の対象となり得たのである。

5 『致命的な思いあがり』

最後の著作『致命的な思いあがり』においても引き続き、のちの思想家へ与えたミルの影響が批判の対象となっている。そこでハイエクは、計画者が社会全体を設計しようとする大陸合理主義の流れに属する社会理論を「構成主義」と名付け、その思考法を批判した。かれの考えるところ、こうした構成主義は、ベンサムを始祖とするが、その後ミルやイギリスの自由党へと受け継がれ、さらにはアメリカの「リベラル」にも影響を与えているという。

「ジェレミー・ベンサムは、われわれがいま法的・道徳的実証主義とよぶものの、もっとも整合的な基礎を發展させていたのであった。それはつまり、法や道徳の体系にかんする設計主義的解釈であって、それによれば、それらの妥当性と意味はすべてその設計者の意思や意図に依拠するとされている。ベンサム自身はこのような展開の末期の人物である。この設計主義は、ジョン・スチュアート・ミルやのちのイギリス自由党によって代表され受け継がれたベンサムの伝統のみならず、自らをリベラルと呼ぶほすすべての現代のアメリカ人を含んでいる」（Hayek, 1988, p. 52, 訳 p.74）。

同書の目的は、ハイエクが生きた時代の社会主義だけでなく資本主義体制における福祉国家も含めて、人間理性の思いあがった合理主義だと批判することにあつた。ここでその対象として、かれと同時代のアメリカにおけるリベラルまで含めていることは、注目に値する。それによれば、アメリカのリベラルに計画主義的な発想を持ち込んだのは、ヨーロッパの合理主義であり、その起源が、ベンサムとミルにあるというのである。

ハイエクが重視するのは、社会の構成員にルールが等しく機能する状態、つまり法の下での平等である。そしてそのような一般的なルールが集まったものとしての法の体系は、設計者の意図により全体として計画されたものであってはならない。福祉国家には、特定の立場にある人々の状態を改善するような社会改良的な処方箋もその政策に含まれるが、かれはこれを便宜主義的な処遇として退ける。こうした設計主義や便宜主義は、合理主義的な思想の産物であり、それをアメリカの「リベラル」は受け継いでいると言うのである。そして、こうした思想の源流にあるひとりとして、晩年のハイエクはより強い口調でミルを論難したのであった。

同書におけるミルへの言及のうち、もうひとつ重要な点は、社会理論の性質についてである。ハイエクは、多くの人間の相互作用のような複雑な現象を説明する理論は、単純な機械的・因果的説明であってはならないと考えていた。「単純な因果的説明の機械論的な方法やモデルは、われわれがその種の複雑現象に向かうにつれてしだいにあてはまらなくなる」

(Hayek, 1988, p. 148, 訳 p.220)。複雑現象を説明する理論において必要とされるのは、「独立して観察するよりも、数多くの要素に関する複合的な効果から説明する理論」なのである。不完全ながらもそれを試みた学者として、かれはアダム・スミスを挙げ、その「見えざる手」的説明は、市場過程に焦点を当てることで社会現象の複雑さを解き明かそうとしたものだったと評価する。

他方で、ジェームズ・ミルとその息子 J.S. ミルは、「市場価値の決定を先行する少数の出来事による因果的決定以外のどんなかたちでも考えることができなかった」(Hayek, 1988, p. 148, 訳 p.221) のだという。つまりハイエクは、プロセス分析としての経済理論を導入したスミスを評価する一方で、前もって価値が決定される前提をおいた経済理論を構築したミルを、複雑現象の解明には至らなかった人物として否定的な評価を下した。さらにかれは、前著同様に、ミルこそが、経済学と先の単純な因果的説明とを結びつけた人物であり、経済学に合理主義を導入し、引いては社会主義の経済学を生み出した起源だと批判する。

「この種の分野で単＝因果的説明を達成しようとする試み（イギリスではアルフレッド・マーシャルとその学派的決定的な影響によってさらに長く引き伸ばされた）は現在まで根強くある。これについては、おそらくジョン・スチュアート・ミルはもっとも重要な役割を果たした。かれは初期に社会主義の影響下にあつて、この偏見を介して『進歩的』な知識人たちに大きな影響をもつに至り、指導的なりべらるにして『合理主義の聖者』との名声を博した」(Hayek, 1988, p. 149, 訳 p.221)。

しかしながらハイエクは続けて、ふたたびミルとテイラーの関係を取り上げ、これまでの批判から一転して、部分的な許容を示すことは興味深い。「その著作の与えた多大な危害にもかかわらず、のちに自分の妻となった婦人に夢中になっていたことを理由に、われわれはたぶん、ミルをあらかた許さなければならぬだろう」(Hayek, 1988, p. 149, 訳 p.221)。

以上、主著を中心に、ハイエクのミル批判の変遷をたどってきた。ハイエクは、ミルを諸論点において批判した一方で、その思想を全面的に拒否したとみなすこともできない。かれが自由論の構築に向かうとき、その出発点に、ミルがあったことは明らかである。同時に、ミルに与えたハリエット・テイラーの知的影響に関する肯定的な評価からわかるように、ミルに対して個人的に抱いていたシンパシーは非常に大きいと考えられる。それでは、かれらの自由論の違いは、具体的にどこに見出されるのか。こうした問題意識に基づき、次節ではミルの著作にも触れつつ両者の主張を比較する。

二 「競争」と「慣習」の関係

本節においては、ミルの記述も参照しつつ、ハイエクの思想と比較検討してみたい。かれらの主張が際立って異なる論点として、ここでは「競争」と「慣習」の問題に着目しよう。

社会科学、とりわけ経済学において「競争」という概念は、これまでもさまざまに論じられてきた。例えば井上は経済学史的な知見に基づいて、同じような企業間で「負けない」ことに主眼を置く「コンペティション」と、質的向上を目指して勝とうとする「エミュレーション」とを区別し、前者をスミスの理想とする平穩をもたらす概念だと再評価した（井上, 2012）。

そして、実際に競争が行われる際に機能する制度として重要になるのが、市場に働く「慣習」の存在である。経済学において慣習がどう論じられてきたかという議論を精緻化したものに、シュリヒトの著作『経済学における慣習』（Schlicht, 1998）が挙げられる。かれは慣習を「制度的思考の基礎を提供するもの」とみなし、その役割を「現在の思考の恣意性を取り除き、新しいアプローチを提示すること」と定義した（Schlicht, 1998, p. v）。かれにしたがえば、慣習はむしろ、経済的・文化的な役割だけでなく、心理的な影響を社会や経済に与える機能を持つ。つまり、市場において慣習は、人びとの行動決定の基礎と位置付けられる¹¹⁾。さてハイエクとミルの著作にも、市場における競争と慣習の関係性について検討している箇所がいくつかある。以下にこれを取りあげ、その違いを吟味しよう¹²⁾。

1 ミルにおける「競争」と「慣習」

ミルは『経済学原理』第2巻第4章「競争と慣習」において、経済学における「競争」概念が、しばしば実際の経済活動で起きていることとは異なっていると述べた。時の経済学者たちは、競争を論じることで、実際にそれがあつたものと考えてしまう誤解をしている。「経済学者たちは、競争の傾向はこういうことをするにあるということが明らかになったとする

11) 市場における慣習の働きに関する経済学的研究については、（吉野, 2014b）に簡便な概説がある。

12) 猪木は、ハイエクとミルの慣習論の違いを以下のように解説している。「…J.S.ミルは、自由主義の分岐点に立った重要な社会哲学者であったと言える。…特に重要なのは、『慣習』という拘束力に対するミルの考え方が、古典的自由主義者と異なるという点である。ミルは『慣習は自由的であり、人々が自由になるのは、ある一定の文化水準が達成され慣習から解放された時である』と考える。しかし、古典的自由主義者は、慣習や伝統によって支えられた自由社会は、自由の行使にとって必要な『安定的な社会環境（=秩序）』を形成する、と見ている』（猪木, 1987, p. 224）。こうした慣習に対する態度の違いという側面から見れば、「古典的自由主義」に近いのは、ミルよりも実はハイエクの方だと言えるだろう。

と、競争はいつの場合にも実際にそのことをなすものだと考えているようなものの言い方をよくしている」(Mill, 1965 [1848], p. 239, 訳2巻 p.290)。

加えて、競争を論じる際には、もうひとつの重要な概念である「慣習」が果たす役割を忘れてはならないと述べる。競争が働いているところには、それをかく乱させる要因として、慣習の存在がある。もし競争概念のみに焦点を当てるなら、実際に起きている経済・社会現象を大きく捉え損ねるのである。「事実において競争がこのように無制限なる支配力をふるいうるようになるとすれば、それは社会現象の現実的経過を大いに誤解するものであろう」(Mill, 1965 [1848], p. 239, 訳2巻 p.290)

『経済学原理』におけるミルは、さまざまなタイプの慣習があることから論じる。そもそもそれは、古くは法律や政府が無いところで、経済的な取引を成り立たせている、当時の社会にとっては必要な制度であった。そこでの取引が純然たる競争市場と異なるのは、取引によって価格が決定されるのではなく、前もって価格が決定されていることである。「経済関係の諸状態の中には、競争が何の役割をも演ぜず、取引の裁定者たるものは暴力か固定的なしきたり（引用者注：慣習）であるという状態がある」(Mill, 1965 [1848], p. 170, 訳 p.244)。ミルによれば、経済学においてひとつしかないと考えられている市場は、実際には二つのタイプがある。それは、競争によって小売価格が決定されるような競争的市場と、慣習的に小売価格が決定されるような慣習的市場の二つである (Mill, 1965 [1848], p. 243, 訳2巻 p.298)。かれ曰く経済学に必要なのは、これらの相互作用の分析であるが、かれはそのなかでも前者のような競争的市場が機能するために、慣習を後景に追いやる必要があると考えていた。

そしてミルは、競争の持つ積極的な役割を軽視しているとして、(当時の)社会主義者を批判したのであった。「…競争の拡大は、たとえさしあたっては一部の労働者に対して有害な影響を与えることがあるとしても、いつも終局的にはひとつの福利となる」。また、「かれら（筆者注：社会主義者）がおかしている最も大きな誤りの一つは、私の見るところでは、こんにち存在するあらゆる経済的弊害を、競争の所為に帰していることである」(Mill, 1965 [1848], p. 794, 訳2巻 p.195)。かれがこう考える理由は、競争の無いところでは刺激に乏しい怠惰な精神状況が生まれるからである。これは、競争が十分に機能している社会こそが経済に活力を生み出し、また新たな知識が生み出されるという洞察に基づいている。このことについて松井は、以下のように指摘している。

「ミルが競争の利点としてあげているのは、第一にさまざまな改良を促すということである。それは端的にはより安価な製品の供給として消費者の利益になるものであるが、

社会全体から見れば資本の労働力の節約という利点をもたらすものである。価格の切り下げに加えてこのような生産分化が競争の現れとして評価されている。……競争過程によって、新知識（単に「今までにない」というだけでなく、今まで気がつかなかったという意味を含む）が発見される可能性があるのである」（松井, 2005, p. 372）。

ミルにしたがえば、人間は元来、怠ける傾向を持った生き物であり、保守的な生き物である。つまり、「人類生来の怠惰癖、消極的になろうとするかれらの傾向、習慣の奴隷となり、いったん選んだ道をいつまでも変えまいとする傾向」（Mill, 1965 [1848], p. 795, 訳4巻 p.196）を持っている。それを打開するには、慣習によって封じ込められている競争的市場を有効に機能させることが必要となる。「競争に対して保護されてあるということは、懶惰のなかに、精神的仮睡のなかに、保護されているということであり、他の人たちと同じ程度に能動的知性的である必要を免除されてあるということである」（Mill, 1965 [1848], p. 795, 訳4巻 p.197）。それを改善するために「今日において必要とされていることは、一部の限られた労働者群に局部的な利得を獲得させ、それによって現在の社会機構を温存することをかれらの利益とさせるところの、古くからの慣習を維持してゆくのではなくして、むしろすべての人に有益な新しい一般的慣行を採用実施すること」（Mill, 1965 [1848], p. 796, 訳4巻 p.198）だとミルは主張する。したがってかれの論理では、競争と慣習は互いに拮抗する関係にあり、そこで競争的市場を有効に機能させるためには、慣習の除去が肝要となるのである。

このようにミルが競争を重視する理由を、杉原は以下のように述べている。「……人間を内なる自然の傾向に抗し、外なる自然に立ち向かってゆくようにさせるもっとも効果的な仕組みとして競争があることをミルは説くわけです」。だからこそ、「……このような競争の仕組みを活用することが新しい社会においても大切」となるのである。さらに杉原は、「社会主義のもとでこのように競争原理が活用される」（杉原, 1994, p. 156-157）と付け加えている。ここでミルが、慣習が取り除かれ競争が十全に機能するシステムとして、最終的には社会主義を構想していたことが確認される。まさにこれこそが、のちに検討するように、ハイエクが最も厳しく批判した論点であった。

2 ハイエクにおける「競争」と「慣習」

これまでハイエクは競争に関する論考をいくつか残している。1948年に論文「競争の意味」（Hayek, 1948b）を記したが、その主たる意図は、「完全競争」の仮定のもとに展開されている経済理論が、時間的経過を考慮した競争の概念を実際には取り入れておらず、無時間

的であることを批判することにあつた。市場における時間的要素つまり動態的性質の重要性を指摘したうえで、次に知識論のひとつとして競争概念を解釈し直したのが、1968年に発表された論文「発見手続きとしての競争過程」(Hayek, 1978a)である（その後、1978年刊行の論文集に収録）。こうして、競争を、なによりも市場社会において人びとが知識を発見していくプロセスとして捉え直すのである。「競争は、科学における実験のように、何よりもまず、発見手続きなのである」(Hayek, 1979, p. 68, 訳 p.97)。このような競争観を前提にして、次にハイエクは、競争が成立するための制度的な要件を考察するに至り、ミルと同様に、競争を有効に機能させるためには、権力を除去しなければならないと考えた。「…（社会の）発展が起こりうるのは、伝統主義的な多数派が、競争に固有な新しい方法による実験を妨げてしまう伝統的な習慣や慣習を、あらゆる人に強制する権力を持たない場合だけである」(Hayek, 1979, p. 76, 訳 p.108)。

ハイエクは、既存の権力のような抑圧を取り除いた上で、さらに競争過程が正常に機能するためには、人びとの間で取引に関する合意が必要だと考えている。そのような合意は、取引が繰り返されるなかで徐々に形成されてきた、まさに慣習たる制度である。また、競争とはハイエクにおいては新しい知識の発見プロセスなので、人びとは競争過程を通じて、慣習に埋め込まれた知識を発見する。つまり、競争が成り立つところにおいてはじめて、慣習に蓄積された知識の発見プロセスが機能する。したがって、ハイエクの論理においては、慣習と競争とは補完的な役割を果たす。ハイエクとミルの相違点は、まさにこの点にある。かくして、ミルが競争に対する慣習を対抗的に考え、除去すべきものであると考えているのに対し、ハイエクは補完的なものと想定し、市場の成立に不可欠なものと想定しているのである。

3 両者の比較による若干の考察

ここまで、両者における慣習と競争の関係性について概観した。こうした論点については、たとえば矢島のように、ミルの『自由論』とハイエクの『自由の条件』を取り上げたいうえで、その相違点よりもむしろ共通点を強調する見方も確かに考えられる。「(かれらの自由論は)大筋のところでも共鳴していると思う。ミルもハイエクも、社会の不当な干渉に対して個人の私的領域を守ることの重要性を強調したが、それと同時に、そのような個人の自由を確かなものにするために、風習（引用者注：慣習 (custom) とほぼ同じ意味合いだと思われる)の持つ重要性をも認めていたと言えるであろう」(矢島, 2001, p. 492)。しかしながら、同じ「慣習」(custom)という言葉でも、ミルとハイエクでは時代背景もその意味合いも異なることには注意が必要である。さらに、両者の慣習論には、本質的な差異も存在するので

はないか。以下にこれについてももう少し吟味してみたい。

例えばミルは『自伝』において「一定の制度と習慣とが与えられれば、労賃や利潤や地代などは、一定の原因によって決定されるが、……一定の制度と慣習という不可欠な条件を、私は最終的なものとは扱わないという点で新規軸を出した。経済法則は自然の必然性にだけによっては決まるのではなく、それと現在の社会機構との組み合わせによって決まるのだから、当然、一時的なもの、社会改良の進捗によって大いに変化を受けるべきものと、本書は扱ったわけである」（Mill, 1981 [1873], p. 247, 訳 p.214）と述べている。

さて、ハイエクの理解においては、本来多様な意味でミルが使っている「慣習」とは、自由な経済活動を阻害する旧来の商慣行のことだけを意味したとされている。それは具体的には、領主の理不尽な地代の要求であり、商人があらかじめ固定的な価格で商売をすることによって得る不当な利益を意味した。ただしこの点については注意が必要である。というのは、本来ミルにおける慣習とは、ハイエクが指摘した意味での旧来的な商慣行だけでなく、慣習を維持したり確立すること、つまり競争を廃止するという意味も含まれるからである¹³⁾。かれの解釈を読む限り、ミルは慣習を全面的に取り除き、経済活動を自由に行なう競争的な市場が形成されることが必要だと主張している。ここでのハイエクの読解は、ミルが本来論じた慣習の持つ多様な側面にはあまり目を向けていないように思われる。しかしながら、こうした慣習への態度の差異こそが、両者の見解を分かつ重要な論点のひとつと言えるだろう。

それでは、ハイエクが支持した意味での市場における「慣習」とは、どのようなものであったか。それは、十分に発展した市場社会において、多数の人間によって多数の取引が行われてきた行為に関する「知識の堆積」そのものであり、人びとの行動の指針となるものである。進化過程を経てなお生き残った慣習に従うことで、先人たちの試行錯誤の結果たる知識が利用可能となる。それこそが、現在の経済活動を支えている、自由な社会の基礎的な条件であって、市場を擁護する論拠であった。かくして、とりわけ後期のハイエクにとって慣習とは、除去されるべきものではなく、むしろ競争過程が正常に機能するために必要な、基礎的な制度として擁護されている。

もちろんハイエクも、すべての慣習が良いものと考えていたわけではないだろう。ひとくに慣習と言っても、人びとの自由な行動を阻害する有害なものもある。慣習という言葉のなかに、労働組合や談合のような社会的正義を実現するための制度が含まれるとすれば、もちろんそれはハイエクの意図するところではない。同じ慣習・慣行でも、このような制度

13) このように、ミルにおいては慣習がしばしば多義的に用いられるのは、時代背景やその前提となる階級制が大きく関わっている。これについてより詳しくは、(小沢, 2023) の論考なども参照のこと。

は、人びとの行動の規範になるどころか、逆に個人の創意工夫の範囲を狭め、競争つまり知識の発見過程の機能を鈍らせるものに他ならないのである。

三 功利主義をめぐる

さらに両者の思想体系は、功利主義に対する立場にヨリ顕著な差異がある。ここではミルの功利主義に対するハイエクによる評価という側面から考察を加えたい。まずはミルが展開した思想において功利主義は、どのような基礎を提供しているかという問題から、順に検討していこう¹⁴⁾。

かれの論理における第一原理とは、「功利」ないし「最大幸福」である。これは「行為は、幸福を増す程度に比例して正しく、幸福の逆を生み出すのに比例して誤っている」(Mill, 1969 [1861], p. 210, 訳 p.467)。幸福とは、快が与えられ、苦痛が除去するときに増大し、不幸とは、快楽が取り除かれ、苦痛が与えられるときに増大する。ミルは、この幸福こそが、人間の行動原理であるとともに、行動や道徳を判断する基準と考えている (Mill, 1969 [1861], p. 216, 訳 p.472)。もし個人の幸福と、社会総体の幸福とが矛盾する場合、例えばある個人の幸福の追求によって、社会総体で見ると幸福が減少する場合はどうだろうか。ミルはここで、ベンサム流の「最大幸福」の原理を導入し、社会総体での幸福が増大することが優先されるべきだと考えた。「功利主義の基本は、行為者自身の最大幸福ではなく、幸福の総計の最大量なのだから」(Mill, 1969 [1861], p. 216, 訳 p.472)。それゆえ社会総体の幸福を増大させるためには、個人はときに自らの行為を抑制することが必要だとみなされる。

ミルは、文明が十分に発展した社会においては、社会全体の幸福の増大のためであれば、自分の行為の抑制は「徳にかなう」行為と評価されるべきであると主張する。「だれかが自分の幸福を全部犠牲にして他人の幸福に最大の貢献ができるのは、世の中の仕組みが非常に不完全な状態にある場合に限られよう。しかし、世の中がこんなに不完全な状態に有る限り、いつでも犠牲を払う覚悟を持つことは、人間にとって最高の徳であることをわたしは十

14) またミルの功利主義に関する理解については(馬渡, 1997, pp. 347-379)「第10章 社会思想の原理」にきわめて包括的な研究サーベイとそれに基づく考察がある。ここで示されているように、ミルの功利主義については、行為功利主義か規則行為主義か、また功利主義をめぐる内在説や外在説など、専門家のなかでもきわめて議論の分かれるトピックのように見える。ただしこれについては功利主義とミルの社会思想が矛盾なく並立すると捉える松井による解釈が筆者には説得的であった。「…ミルの自由主義と功利主義を矛盾し対立する契機をはらむものとしてではなく、この二つを統一的に把握しようとしたのだと位置づける研究が現われてきた。こうした研究はいずれもミル思想を統一した内的論理を持つものとするものであった」(松井, 2005, p. 333)。

分に認めるものである」(Mill, 1969 [1861], p. 218, 訳 p.477)。

社会総体の幸福のためには、個人の幸福は時に制限されなくてはならない。この論理は、時に個人の自由な行動に強制が加えられてもやむを得ないとする考え方の根拠となる。むしろ、『自由論』にあるように、個人の意見の多様性はあくまで守られなければならない。しかしながら、特に経済的な利益を考える際、例えば貧困層がいつまでも幸福を享受できない状態にある場合、富裕層は自らの幸福を多少なりとも犠牲にしても、それを改善する必要がある。そうすることで社会が発展することは、ミルいわく人間の「徳」にかなうのである。ミルは『功利主義論』においても、次のように述べる。「社会連帯が進み、社会が健全に成長すれば、だれもが他人の福祉にますます強い個人的関心を、事実抱くようになるばかりか、だれもが自分の感情と他人の善をますます同一視するように、少なくとも他人の善をますます實際上考えるようになる」(Mill, 1969 [1861], p. 231-232, 訳 p.494)。ハイエクはこうした発想を、他人の状態の改善のためには時に個人の犠牲もやむなし、という再分配を肯定する思考法の基礎を提供していると批判の矢を向けたのだった。

しかしながら、ここで注意したい点として、社会発展のどの段階においても自発的あるいは強制的な犠牲が正当化されるのか、という問題がある。馬渡も指摘しているように、ミルは、社会が未発展な段階においては、自発的な犠牲を功利主義の観点から正当化する一方で、強制的な犠牲を積極的に提唱することはなかったという（馬渡, 1996, p.352-355）。したがって、ハイエクの批判もまた、ミルのこうした側面を見落としているようにも見える。つまり、ミルが（例えば殉教者のような）自発的な犠牲を容認していたにもかかわらず、ハイエクはそれを、所得再分配政策のような強制的な犠牲を正当化する論理だといわば「拡大解釈」して捉えていたのではないか。

このような解釈が生じる理由は、功利主義の人間観における「合理性」の捉え方の違いに原因があると思われる。つまり、功利主義的な考え方に基づいた、人間行動の快樂および苦痛の把握は、果たして正確に可能なのか、という問題である。ミルのような功利主義者は、基本的に快・苦が計算可能なものと想定する。この論理を徹底すれば、例えばある人が苦の多い状態にあると客観的に把握することができ、さらにはその人の状態を改善し快を増やすような施しや政策が他の誰かによって提供可能と想定されることになる。この点をハイエクは批判したのであった。「ジェレミー・ベンサムと彼の学派の厳密な功利主義は、行動の適切性を、それに起因する快樂と苦痛の明示的な残高計算によって、判断しようと企てる。…最大多数の最大幸福が決定されることになる快樂と苦痛の計算に関するベンサムの概念は、ある特定の行為それぞれの結果がすべて行為者に既知であり得ることを前提にしている」(Hayek, 1976, p. 18, 訳 p.31)。かれの考えに従えば、例えばある人の状態が改善されたかど

うかを正確に把握することはそもそも難しいのである。

ハイエクは続けて、功利主義の二つの大きな流れを概観し、ひとつを特殊主義的功利主義、もうひとつを包括的功利主義と名付け、一般的に対として用いられる表現に対応させている（Hayek, 1976, p. 20, 訳 p.33）。すなわち、ここで前者は個々の行為がどれだけ功利をもたらしかを扱う行為功利主義、後者はルールがどれだけ功利をもたらしかを判断する規則行為主義のことである¹⁵⁾。かれは、行為の判断にあたって「全知全能という事実的仮定」を導入せねばならない点で、前者を現実離れしていると批判する。そして同様に、ルールが機能することで、社会全体が特定の目的を果たすことに合意しているかのように捉える傾向があるとして、後者をも批判する。こうしたハイエクの功利主義批判は、まずはその合理主義的な人間観に向けられたものだが、次に、ルールの性質に対して批判が加えられることになる。

ハイエクによれば、人間は行為の帰結に関して本質的に無知であるが、そこで文明社会にある「ルール」に従うことでそれに対処してきた。それにもかかわらず、功利主義者は、こうした人間の無知を無視しているという。「わたしが常々驚かされてきたのは、真面目で知性のある人々が、疑いもなく功利主義者はそうであるが、どうして大部分の特定の事実に関するわれわれの必然的な無知というこの決定的事実を深刻に受け止めずにすることができたのかということである。…かれらは、われわれの行為の結果を決定する大部分の特定の諸事情に関する、この免れ難い無知への一つの適応として、ルールの意義を把握したことは決して無い」（Hayek, 1976, p. 20, 訳 p.33）。

すでに論じたように、功利主義はしばしば、幸福の小さい人間の状態の改善を優先すべき問題であるとみなす。その実行にあたっては、特定のカテゴリーの人間の状態を改善するような特殊なルールを設ける必要があるだろう。しかしながらハイエクは、一般性を持つ万人に等しく働くルールこそが自由な社会で機能するルールだと考えているため、個別に機能するルールには反対する。このため、ミルの考えるような、特定の人々の状態を改善するための、ひいては再分配を肯定する論理は退けられるのである。

かれの説明に従えば、市場で働くルールとは、あくまで部分的な適応が積み重なって形成されてきた、進化過程のなかで生まれたものである。それは、功利主義的アプローチのように、ルールの帰結について人間が知っているという前提から導かれたのではない。「環境の諸事実に関する知識によって導出されるのではなく、われわれが得たこうした事実への人間の単なる適応からなる。…それらは予見された特定のニーズに適合するように構築されてき

15) ハイエク自身は行為功利主義と規則功利主義という用語の導入には慎重であった。しかしながら、ハイエクの「ルール哲学」が帰結主義的な意味合いを持つことから、かれ自身の思想もまた「広義の功利主義」としてみなされる可能性を秘めているという池田の指摘もある（池田, 1986, p. 109）。

たのではなく、進化の過程で淘汰されてきたのである」（Hayek, 1976, p. 21, 訳 p.90）。

したがってハイエクは、功利主義的な社会理論を、ルールが進化してきたことを見落とし、理性的な設計の産物であるとみなす点で批判する。「整合的な功利主義は、しばしば、進化の産物を神人同形同性論的に設計の産物と解釈し、また擬人化された社会をこうしたルールの創作者と仮説せざるをえなくなる。…すべての理論に神人同形同性論的性質を与えているものは、行動ルールをある単一の目的群の達成を目指す社会の一つの行為計画の一部とする解釈である」（Hayek, 1976, p. 63, 訳 p.90）。

このように、ミルの功利主義とそこから導かれる自由論に対するハイエクの評価は、ひとつにはその人間観において、いまひとつはそのルール概念においていくつかの差異がある。このため、ミルの社会思想に対する評価は、総じて批判的なものとなっている。

四 おわりに：ミルへの言及から照らされるハイエク思想の新しい側面

本稿では、ミルに対するハイエクの評価について検討したが、とりわけ両者の思想を、主に「競争」と「慣習」という観点から比較考察した。さらには、両者を隔てる大きな論点のひとつである功利主義への評価についても吟味し、かれらの主張の特質を検討した。最後に本節では、両者の差異を「個人の自律性」と「社会制度の安定性」という観点から小括し、本稿の結語としたい。

自由な社会の構造を考える時、想定する必要があるのは、第一に自由に行動することが許された個人の存在である。このため自由主義者にとってそもそも「自由」とは、権力からの「強制の無い状態」を意味する。ただし、個人が自由に行動しているだけでは、そこにある社会が、ある安定性を持ったシステムとして継続して成立しうるには不十分である。仮に自由に振る舞う個人しか存在しなければ、このような状態とは野放図にふるまう個人の集まりでしかなく、そこはほどなく無秩序な世界に陥るだろう。このような状態にならずに文明社会が成立するためには、安定した制度をどこかに必要とする。つまり、自由論や自由な社会を考えるとときには、第一には自由に行動できる個人、そして第二にはどこかでそれを支えているような、社会制度の安定性がどのようにもたらされるかを論じる必要がある。

この観点から見ると、両者の社会思想はどのように理解できるだろうか。まずハイエクから検討しよう。本稿の関心に照らして言えば、かれの考える個人は、伝統や慣習の存在によって無知に対処可能となる。そしてかれの重視する「自生的秩序」とは、進化過程を経て残ってきた伝統や慣習（別の表現では「ルール」）に個人が従い、行動した結果として、意図せずに発生したシステムである。これがあることで、自由な社会においても、個人は起こ

りうるできごとに関してある程度予測可能となる。つまり、ハイエクの思想体系において、人びとは、こうした社会制度の存在によって知識の不完全性を克服できる。こうしたことから、とりわけ後期のハイエクの著書においては、個人の自由の重要性よりも、秩序や文化といった制度がいかに成立しうるかに問題意識が移っていったと考えられる。

一方で、ミルはどうであろうか。すでに見たように、ミルが考える自由な社会の条件とは、まずは個人が多様性を発揮することにあり、そのために社会に存在する慣習をできるだけ取り除くことにあった。ミルは、個人が社会や文化から影響を受けて育ち、生きていることを否定しないけれども、それだけでは社会全体の活力が生まれるには不十分であり、何よりも個人の能力が発露されることが必要だと考えていた。その意味で、社会制度の安定性や継続性を擁護するよりも、自由で自律的な個人の方を強調して論じる必要があったのであろう。

この差異には、当然のことながら、両者が生きた時代の違いが如実に反映されている。グレイが指摘しているように、ミルの念頭にあったのは、ヨーロッパの知識人が持っていた合理主義的な生活様式である¹⁶⁾。ミルは田舎と都会が近くなることで、差異が無くなりつつある時代に危惧を抱いていた。かれの生きた時代のヨーロッパは市場社会が勃興し、急速な変化を遂げていた。そのなかで個人が個性を守り、発揮せねばならないと考えたのがミルであった。他方でハイエクが生きた20世紀とは、19世紀型の古典的自由主義にほころびが生じ、資本主義の問題が次々に露呈するなかで、社会主義国家が生まれ、大きな戦争が二回も起きた時代であった。そこでかれもまた急速に変化を遂げる社会に危惧を抱き、真に必要な「自由」の問題に取り組んだのであった。ハイエクとミルの論じた「自由」に関する比較については、このようなコンテキストの差異も含めて、機会を改めてさらに論じてみたい。

そもそも、古典的自由主義者と称されるアダム・スミスが唱えた「見えざる手」には、さまざまな前提が付されていた。同じようにハイエクは、単に賛美するのではなく条件を周到に付与しつつ、市場や競争過程のメリットを強調した。そして、社会主義や福祉国家のような社会に「計画」を持ち込む傾向を厳しく批判した。本稿の関心から言えば、こうした市場擁護の論拠として、ハイエクは、「慣習」の重視によって、個人の自由な意思決定に基づいた「競争」を放任するのではなく、それを補完すべく「慣習」が機能する制度の存在を重視していたことになる。

しかしながら、競争という観点から見てみると、ハイエクもミルも、どちらも「他人を蹴落とす」という意味での競争を訴えていたのではないことがわかる¹⁷⁾。また、個性の発揮や

16) こうした論点については、例えば (Gray, 1983) に詳しい。

17) ハイエクの競争観について、例えば太子堂は「競争から降りること」にその本質を見出す (太子堂, 2009, pp. 146-148)。他方で、上でも取り上げたように、松井もまた、ミルの競争観は、勝ち負け (優劣) をつけるためのものではないとみなす (松井, 2005, p. 372)。いずれも、優勝劣敗を肯定することを正当化するような思想ではないと言えるだろう。

個人の自由については、よりはっきりとハイエクはミルの影響下にある。何よりミルとテイラーとの関係性に対しては、なみなみならぬ敬意を持っていた。にもかかわらず、ハイエクが社会哲学的にはミルを批判し続けた要因は、どこにあるのか。

ひとつには、ハイエク自身が、ミルの執筆活動における見解の変化を十全に捉えきれていなかったことである。当然のことながら、『経済学原理』を書いたミルと、『自由論』を書いたミル、さらには『自伝』において述懐されているミルでは、状況設定や時代背景、そして問題意識は異なっている。したがっていまのわれわれからみると、ハイエクは、ミルが論じた競争や慣習の持つ多様な側面や文脈、あるいは意見の変化を捨象して、一貫して批判に徹したきらいがある。ただ同時に、何度も引用して批判すること自体が、ミルの思想が重要な参照点であったことも表している。やはりハイエクにとって、ミルの存在は大きなメルクマールであったことも事実であろう。

いまひとつは、ミルが唱えた「社会主義論」に関することである。ミルが後半生に見出したのは、これ以上発展の余地がないほどに経済発展を成し遂げた「静止状態」の必要性と、その先の「社会主義」の可能性であった。個性の開花は、十分に発展した文明社会でのみ可能となる。杉原によれば、ミルの社会主義は穏健なものにとどまるものであって、マルクスの共産主義とは本質的に異なるレベルにある。両者を分かつポイントは、前者が漸進的な社会改良を訴える一方で、マルクスの理論にはそのような主張はほとんど見られないことにある（杉原, 1994, p. 150）。そしてまさに、ミルが考える漸進的な社会主義の基礎が、競争的な発展過程にみられるのである。

しかしながら、こうした社会主義的な発想は、ハイエクの師匠筋にあたるミーゼスが、鋭く批判した点でもあった。例えばミーゼスは、その著書『自由主義』において、以下のようにミルを批判している。「ミルは古典的自由主義の典型であり、特に晩年は妻の影響もあって、弱々しい妥協に満ちていた。かれは社会主義に徐々に傾斜し、自由主義と社会主義の思慮のない混同の元凶となり、イギリス自由主義の衰退とイギリス国民の生活水準の低下を招いた」（Mises, 1962 [1927], p. 195）。ハイエクは、基本的にはミーゼスのこうしたミル批判の態度をある意味では素朴に受け継いでしまっているように見える。そして、大陸の社会主義思想と合理主義思想がイギリスで拡大する際に大きな役割を果たした人物として、ミルを言えば「戦犯」として扱ったのだった¹⁸⁾。

かつて八木は、日本語版ハイエク全集の解説で、ハイエクのミル論について次のように評した。

18) こうした社会主義批判の一方で、ハイエクは、マルクスに対しては言及の頻度そのものがさほど多いとはいえ、内容に関しても十分な批判を加えたとは言いがたい。この点については（吉野, 2022）を参照のこと。

「……ミルとハリエットに対するハイエクの目は、彼らの知性と可能性と豊かさに向けられている。ハイエクの立場からすれば、二人へのもっと苛烈な批判もあり得たであろう。ハイエクは確かにミルを第一級の思想家として評価してはいない。しかし、ハイエクは個人と社会の対立的な思想的葛藤を経験した現代人として、ミルとハリエットに共感的なまなざしを注いでいる。……ハイエクは、自分が必ずしも歓迎しない思想の発展に対しても、価値判断を抑制して、それを探求することができる公正さを有した著作家であったと思う」（八木, 2009, p. 289）。

ハイエクがもし扇動者（アジテーター）ではなく、八木の言うような「公正さを有した著作家」であったならば、かれにミルが唱えた穏健な意味での社会主義を受け入れる余地はなかったのだろうか。

ファーラントが指摘しているように、ミルの「きわめて共感的かつ注意深い読者」であり、なおかつハイエクの盟友でもあったロビンズは、その社会主義と労働組合に関する分析について、「資源配分の問題全体を先送りにしている」として批判した。だがその一方で、ミルの言う社会主義はせいぜいが「サンディカリズム（労働組合主義）」の一種に過ぎず、通常人びとが想起するような（そしてハイエクが批判の対象としたような）社会主義とは似て非なる社会制度であると、擁護もしたのである。さらにファーラントは、ハイエク主義的な知識の分業論と、ミルの分権的な社会改良主義に、ロビンズが共通点を見出していたことも示唆している（Farrant, 2010, p. 114）。ハイエクの主張を見れば、労働組合やそれをもとにした社会システムを素直に支持したとは考えにくい、何よりかれは拙速な社会変革を批判し続けた人物でもある。かくして、ハイエクの社会思想を、ある種のミル的な方向性、つまり分権的な社会改良主義の観点から再解釈することに、一考の余地はないだろうか。

参考文献

- Borchard, Ruth. (1957) *John Stuart Mill: the man*. Watts.
- Caldwell, Bruce. (2003) *Hayek's challenge: an intellectual biography of F.A. Hayek*. University Of Chicago Press. コールドウェル, B.J. (2018) 八木紀一郎監訳・田村勝省訳『ハイエク：社会学方法論を巡る闘いと経済学の行方』、一灯舎。
- Caldwell, Bruce. (2008) Hayek on Mill. *History of Political Economy*, 40(4), 689-704.
- Caldwell, Bruce, & Klausinger, Hansjörg. (2022) *Hayek : a life, 1899-1950*. University of Chicago Press.
- Cubitt, Charlotte. (2006) *A Life of Friedrich August von Hayek*. Authors OnLine Ltd.
- Ebenstein, Lanny. (2018) Hayek's divorce and move to Chicago. *Econ Journal Watch*, 15(3), 301-321.
- Farrant, Andrew. (2010) A renovated social fabric: Mill, Hayek, and the problem of institutional change?

- In Andrew Farrant (Ed.), *Hayek, Mill, and the liberal tradition* (pp. 81-129): Routledge.
- Gray, John. (1983). *Mill on liberty : a defence*: Routledge & K. Paul.
- Hayek, Friedrich A. (1942) J.S. Mill at the Age of Twenty-five. In John Stuart Mill (Ed.), (pp. v-xxxiii): University Of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2009) 八木紀一郎監訳・太子堂正称訳「ジョン・スチュアート・ミル——二〇代半ばの頃」、『ハイエク全集Ⅱ-7 思想史論集』、pp. 109-132、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1948a) *Individualism and economic order*. University of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2008) 嘉治元郎・嘉治佐代訳『新版 ハイエク全集Ⅰ-3 個人主義と経済秩序』、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1948b) The Meaning of Competition. In *Individualism and economic order* (pp. 92-106): University of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2008) 嘉治元郎・嘉治佐代訳「競争の意味」、『新版 ハイエク全集Ⅰ-3 個人主義と経済秩序』、pp. 129-148、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1951a) Introduction. In *John Stuart Mill and Harriet Taylor: their friendship and subsequent marriage*: Routledge & Kegan Paul. ハイエク, F.A. (2009) 八木紀一郎監訳・太子堂正称訳「ジョン・スチュアート・ミルとハリエット・テイラー」、『ハイエク全集Ⅱ-7 思想史論集』、pp. 133-146、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1951b) *John Stuart Mill and Harriet Taylor: their friendship and subsequent marriage*: Routledge & Kegan Paul.
- Hayek, Friedrich A. (1952) *The Sensory Order: An Inquiry into the Foundations of Theoretical Psychology*: University Of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2008) 穂山貞登訳『新版 ハイエク全集Ⅰ-4 感覚秩序』、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1960) *The Constitution of Liberty*: University Of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2007) 気賀健三・古賀勝次郎訳『新版 ハイエク全集Ⅰ-5・6・7 自由の条件Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1976) *Law, Legislation and Liberty, volume 2: The Mirage of Social Justice*: University Of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2008) 篠塚慎吾訳『新版 ハイエク全集Ⅰ-9 法と立法と自由Ⅱ 社会主義の幻想』、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1978a) Competition as a Discovery Procedure. In *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas* (pp. 179-190): Routledge & Kegan Paul. ハイエク, F.A. (2009) 古賀勝次郎監訳・楠美佐子訳「発見手続きとしての競争」、『ハイエク全集Ⅱ-6 経済学論集』、pp. 187-202、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1978b) Liberalism. In *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas* (pp. 119-151): Routledge & Kegan Paul. ハイエク, F.A. (2009) 山中優監訳・田総恵子訳「自由主義——その歴史と体系」、『ハイエク全集Ⅱ-5 政治学論集』、pp. 119-158、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1979) *Law, Legislation and Liberty, Volume 3: The Political Order of a Free People*: University of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2008) 渡部茂訳『新版 ハイエク全集Ⅰ-10 法と立法と自由Ⅲ 自由人の政治的秩序』、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1988) *The Fatal Conceit: The Errors of Socialism*: University of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2009) 渡辺幹雄訳『ハイエク全集Ⅱ-1 致命的な思いあがり』、春秋社。
- Hayek, Friedrich A. (1994) *Hayek on Hayek: An Autobiographical Dialogue (The Collected Works of F. A. Hayek)*: University Of Chicago Press. ハイエク, F.A. (2000) 嶋津格訳『ハイエク、ハイエクを語る』、名古屋大学出版会。
- Légé, Philippe. (2008) Hayek's Readings of Mill. *Journal of the History of Economic Thought*, 30(02).
- Mill, John Stuart. (1965 [1848]). *Principles of political economy : with some of their applications to social philosophy (The Collected works of John Stuart Mill, Vol. 2-3)*: University of Toronto Press. ミル,

- J.S. (1959) 末永茂喜訳『経済学原理』、Vol. 1-5、岩波書店。
- Mill, John Stuart. (1969 [1861]) *Utilitarianism reprinted in Essays on ethics, religion and society (The Collected works of John Stuart Mill, Vol. 10)*: University of Toronto Press. ミル, J.S. (1967) 伊原吉之助訳「功利主義論」『世界の名著シリーズ ベンサム ; J.S. ミル』、pp. 459-528、中央公論社。
- Mill, John Stuart. (1977 [1859]) *On Liberty*. In John M. Robson & Douglas Peter Dryer (Eds.), *Essays on politics and society (The Collected works of John Stuart Mill, Vol. 18, pp. 213-310)*: University of Toronto Press. ミル, J.S. (1967) 早坂忠訳「自由論」、『世界の名著シリーズ ベンサム ; J.S. ミル』、pp. 211-348、中央公論社。
- Mill, John Stuart. (1981 [1873]) *Autobiography and literary essays (The Collected works of John Stuart Mill, Vol. 1)*: University of Toronto Press. ミル, J.S. (1960) 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』、岩波書店。
- Mises, Ludwig. (1962 [1927]) *Liberalism, 2nd edition*: Sheed Andrews and McMeel.
- Packe, Michael St John. (1954) *The life of John Stuart Mill*: Macmillan.
- Schlicht, Ekkehart. (1998) *On Custom in the Economy*: Oxford University Press, USA.
- 池田 幸弘 (1986) 「ハイエクの個人主義論：メンガーとの関係を中心に」、『三田学会雑誌』、79(1)、pp. 102-117.
- 泉谷 周三郎 (1977) 「J・S・ミルの思想と『ハリエット・テイラーの神話』」、『横浜国立大学人文紀要第一類 哲学・社会科学』、23、pp. 46-65.
- 井上 義朗 (2012) 『二つの「競争」：競争観をめぐる現代経済思想』、講談社。
- 猪木 武徳 (1987) 『経済思想』、岩波書店。
- 岡本 哲史・小沢 佳史 (2021) 「不平等をめぐる経済学的・経済思想史的研究：J.S. ミルと K. マルクスを中心に」、『産業経営研究所報』、53、pp. 27-46.
- 小沢 佳史 (2023) 「多様な私有財産制の可能性と政府の役割—— J. S. ミルの『経済学原理』における幸福と適度な「快適の標準」」、柳田芳伸編、『愉楽の経済学：マルサスの思想的水脈を辿って』、pp. 133-158、昭和堂。
- 川名 雄一郎 (2015) 「新しい資料、新しい思想？」、『経済学史研究』、56(2)、pp. 67-93.
- 佐々木 憲介 (1995) 「J.S. ミルにおける分配の法則の成立根拠」、『経済学研究』、45(2)、pp. 77-93.
- 杉原 四郎 (1994) 『J.S. ミルと現代』、岩波書店。
- 太子堂 正称 (2009) 「第四章 競争と格差：何のために競うのか」、佐藤方宣編、『ビジネス倫理の論じ方』、pp. 119-154、ナカニシヤ出版。
- 西部 邁 (1996) 『思想の英雄たち：保守の源流をたずねて』、文藝春秋。
- 松井 名津 (2005) 「ジョン・スチュアート・ミル」、鈴木信雄編、『経済思想 第4巻 経済学の古典の世界 1』、pp. 332-382、日本経済評論社。
- 間宮 陽介 (2006) 『増補 ケインズとハイエクー “自由” の変容』、ちくま文庫。
- 馬渡 尚憲 (1997) 『J.S. ミルの経済学』、御茶の水書房。
- 諸泉 俊介 (2004) 「J.S. ミルの経済学とイギリス経済的自由主義—— F.A. ハイエクのミル批判によせて」、小柳 公洋・岡村 東洋光編、『イギリス経済思想史』、pp. 112-131.
- 八木 紀一郎 (2009) 「解説——経済学史家・伝記作家としてのハイエク」、ハイエク全集Ⅱ-7 思想史論集』、pp. 281-292、春秋社。
- 矢島 杜夫 (2001) 『ミル「自由論」の形成』、御茶の水書房。
- 山下 重一 (1971) 『J.S. ミルの思想形成』、小峯書店。
- 吉野 裕介 (2014a) 『ハイエクの経済思想：自由な社会の未来像』、勁草書房。
- 吉野 裕介 (2014b) 「慣習：どう生活に役立つのか」、橋本努編、『現代の経済思想』、pp. 451-471、勁草書

房。

吉野 裕介（2022）「ハイエクのマルクス批判：その系譜と意義」、『関西大学経済論集』、71(4)、pp. 299-320。

